

十三番目の秘め事

mnfikmyhk Fukapon

十三番目の秘め事

Fukapon

2012年1月15日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2012 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>

「亞里亞様、新成人おめでとうございます」

「おめでとう」

「おめでとーっ」

「おめでとっ。そして、乾杯っ！」

二〇一二年、一月九日。都内某所。

小洒落たフランス料理店の雰囲気を見無視して騒ぐ女性が四人。

「ありがとう。でも、亞里亞の誕生日は、十一月だよ？」

そしてマイペースな彼女が一人。

「細けえこたあいんだよ！ さ、飲みな飲みな。今日は百合子さんのおごりだ！」

「眞深、あんた金余ってんでしょ？ 出しなさいよ」

「えーとさー、先週、マンション買ったんだよねー」

「はあ？ どこによ？」

「六本木だねー、独身貴族様だからねーきやははー」

「あーあー、悪い大人の見本ね。亞里亞ちゃん、眞深みたいになっちゃダメよ？」

「そうなの？」

「そうなの。もつと女の子らしく——」

「なんて言ってる咲耶ちゃんも、ボクも、姉妹みんな独身なんだけどねー」

「べ、別に、男なんて気にしなきゃいいのよっ」

「そうそう。妹たちの代わりにメイドが結婚してくれたじゃない。憧れのおんちゃんねー」

「そ、それは……」

頬を赤らめるじいやこと水原改め海神百合子。

「大丈夫。亞里亞ちゃんはまだ若いもん。百合子さんの教育を受

けた由緒正しい血統だしね。三十路手前の咲耶ちゃんとは違ふよ！」

今日も元気に齒に衣着せぬは衛。

「衛、あんた言うようになったわね」

キツイ視線が如何にも似合う、テーブルの華は咲耶。

「まあねー。姉妹で数少ない彼氏持ちだからねー」

「おっと、咲耶もこりや言い返せないわな。さー飲め飲めー」

早くも空になったワイングラスを掲げる眞深美。

「飲むー。亞里亞はみんなと一緒にいたいから、彼氏、いらなのー」

ついに成人となった今も、ゆつくりおつとりの亞里亞。

今日は五人で、亞里亞の「成人おめでとうパーティ」を開催中だ。

姉妹全員が集まれるのはもう少し先になりそうだったので、ひとまず、集まれる人だけでの先行パーティと言ったところである。

「来年の雛子ちゃんで、十三人、いよいよ全員大人になるのねえ」

「実感わかないなー。自分が二十九つてのもねー。先生なんて仕事やってると、周りは若い子ばかりだし。おかわりー」

ボンボンと飲み続ける眞深美に、一同深く頷いていた。

プロミス・アイランドで十三人の姉妹と一人の兄が会ってから、十三年。時の流れは誰にも等しい。

「だよね。化粧品のモデルさんも若い子が多いから、ボクも同じつもりになっちゃう」

衛が綺麗に化粧して、グラスを傾ける姿は、確かに十三年後なのだ。

「私から見ると、みなさん十分にお若いのですが……」

「じいやは、うーんと、あ、ついに四十歳？」

「ち、違いますっ！」

しかし姉妹（とメイド）の仲睦まじい姿に変わりはない。

十三年間、一度として絶えたことのない笑顔を咲かせて、今宵も夜が更けていく。

「うひゃー、寒いつ。こりや酔いも醒めるわあ」

「はあ、ちゃんと醒まして仕事行きなさいよ？」

「もつちろん。明日は午前中の授業ないしねー。あいはぶのーくらーす！」

咲耶と真深美を先頭に、一行は店の外に出た。

成人式の夜とは言え、真夜中ともなると静まりかえっている。

そして凍るように冷たい外気に曝されようと、猫背になることなく、ゆつくりと会話するのは亞里亞と百合子だ。

「亞里亞様、お送りいたしましたようか？」

「うん。咲耶も、衛も、いるから、大丈夫。じいやこそ、早く帰らないと、兄やが心配するよ？」

「そ、そうですね。亞里亞様がお元氣だったことも、ちゃんとお伝えしますね」

「うん、ありがとう」

百合子はもう、亞里亞お付きのメイドではない。しかし慕い仕える姿も、ずっと変わらぬものの一つなのだろう。

衛は久しぶりに亞里亞たちのやりとりを見届けると、抱き合い暖を取る咲耶と真深美を一瞥。何とはなしに通り向こうの歩道を見た。

（あれ？）

流すだけだったはずの視線を捉えたのは、最近見ていないとは言え、忘れようもない姿だ。

しかし見間違いかも知れない。この世にはよく似た人が三人はいるらしい。彼女は改めて歩道を確認しながらも、疑問のままに咲耶と真深美の肩を叩いた。

「ねえ、あれ、あにいだよね？」

「んあー？ どこよ？」

「本当だわ。って隣……」

「うっあー、きたこれっぐぐ——」

「ちよつと黙りなさいよ。百合子さんに聞こえる！」

三人が見たのは果たして、彼らの兄、海神航だった。

正確には、航ともう一人。

「妹の誰か、つてわけではなさそうね」

「雛子ちゃんよりずっと若いんじゃないかな。高校生？ 中学生？」

見知らぬ女の子が歩いていることを見つけてしまった彼女たちは、女の子の正体について思い巡らせながらも、早々に行動を起こす。

咲耶は早速、帰ることを促す。

「じゃ、じゃあ、帰りましょうか。駅はあつちよね？」

幸いにして、彼女の向かう方向と、航たちの向かう方向は逆だ。素知らぬふりで帰途につけば逃げ切れる。

「百合子さん、行こう」

衛が呼びかけると、百合子も亞里亞も、当然応じてついてくる。

「はい。亞里亞様も、参りますよ」

「はい。亞里亞も、帰るー」

あとがき

お久しぶりです。まさかまた、シスプリオンリーに出ようとはめ下さい！

十周年記念は『べびプリ』オンリーと同日だったので、シスプリ側を十年進めて、春風と亞里亞ちゃんを同級生にして書いたんですよ。（ウェブで無料頒布してるから読んでねっ）となれば、今回は十三年進めるかと。しかし、今年は未成年ばかり書く決めたので……。

さて、今回は早くもあとがき終了。これから、夜の、ね……。明日は直行かなあ。無事リリースできたら。

冬コミも何とかって状況で、中一週はちよつとどころでなく厳しかった。書く時間ほとんどなくて、こんなだけど、最後の最後ぐらいは笑えるようにがんばったつもり！ 少しでも楽しんでいただければ幸いです。

では、また。シスプリオンリーで？

二〇一二年一月十四日、亞里亞ちゃんのドレスを作ってみようかと思う私より。

「いいねえ、あんちゃん。やりたい放題！」

「あ、あのっ、私も……」

「亞里亞、じいやとの、子供の人数、聞いたのに……」
十三人十三色。いや、今日からは――

「ごめんなさい。私、生理まだだから……」
十四人十四色。

駅へと誘導する衛は酔いの代わりに緊張を帯びて、笑顔も消え
気味に一歩二歩と確かに踏みしめる。

（ひとまず何とかなりそうね）

さりげなく最後方に下がり、みなの中を見ながら歩き出した
咲耶が安堵したとき。

くると振り返ったのは亞里亞だった。

「あ、お帽子忘れたー」

「え？ 何？ 帽子？ ああ、私が取ってくるから先に行つて
て！」

努めて平静を装ったつもりは咲耶だったが、大慌ては明らかだ
った。

しかし、事態を悪化させたのは彼女の態度ではない。

「ううん、亞里亞が、行く、ん？ ねえ咲耶、あれ――」

咲耶の向こう、反対側の歩道で起きていた事態。

咲耶たちの努力もむなしく、亞里亞は平然とリポートする。

「兄やだあ！」

亞里亞が兄やと声を上げれば、百合子はもちろん反応した。

「えっ？ 航様ですか？」

「見つけちゃった……」

振り返った彼女の顔を見て、咲耶は小さく溜息をつく。

百合子の顔から血の気が引いていく。

「あ、あの、ね、百合子さん――」

何か言わなくちゃと焦る衛の声を聞きながら、咲耶は彼女を見
つめることしかできなかった。

「隣の、方は……」

答えの分かりきった問いに、一同黙りこくった。

衛が改めて航を見ると、二人の状況は悪化している。

「兄やの、恋人、なの？」

マイペースな亞里亞の答えは、的を射ていう。

この真夜中に、腕を組んでいる男女。恋人あるいはそれに類す
ものの以外に、何であり得るだろうか。

百合子とて他の可能性を思いつかない。

近くの赤信号が、彼女の顔を赤く照らす。しかし、真つ青な顔
に色が戻ることはなかった。

「百合子さんっ！」

膝が折れ崩れる彼女を、背後の衛が慌てて支えた。

現場に居合わせた衛、亞里亞、眞深美、さらには同居人の四葉
と花穂が、夜更けにもかかわらずダイニングテーブルを囲んでい
る。

そして最後に席に着いたのは、今やこの家の最年長者たる咲耶
である。

「大丈夫、眠ったわ。お酒も入ってたからね」

さてどうしたものかと、みな困り顔。かと思いきや、若干約一
名、興味津々の笑みで疑問を投げている。

「でさでさ、ホントに不倫なの？ 不倫なの？」

花穂らしいとは誰が思ったが、さすがにいただけない。

長姉故の教育係を未だに担っている咲耶は、極めて穏やかに注
意する。

「花穂ちゃん、百合子さんの気持ちを考えなさい」

対してあつけらかんと返す花穂に、隣の四葉も幾分か同意を示
している。

「はい。でも、そんなに深刻になることなのかなあ？」
 「確かにそうデスね。まずは事実を確かめるのが先決デス。兄チャマのことデスから、案外、落ち込む必要のない理由かも」
 「なるほど、一理あるわね。伊達に本業じゃないのね」

「もちろんデス！ FUDは危険なデス」
 念願かなって探偵に、と言っても彼女の夢見ていた探偵とは全く異なる、信用調査の仕事に就いている四葉。かつてのお遊び色はすっかり抜けている。

この落ち着いた意見には、咲耶も衛も納得したようで、お茶をすすりながら考えを改めた。

「言われてみれば、そうなのかも。ボクたちは慌てすぎたのかな」

「そうね。だいたい、九歳年上と結婚したお兄様なのよ？ 十以上も下の子に手を出すような趣味じゃ——」

「女の子なら誰でもいいのかも！」

ようやく落ち着いてきた話を引っかき回すのは、やっぱり花穂なのである。

そしてまたもや、咲耶がたしなめる。

「私たちのお兄様に限って、それはないって信じられるでしょう？」

「うーん、でもさあ『百合子さんに手を出すなんて』って咲耶ちゃんだって言ってたじゃない」

手足をバタバタ、いくつになっても落ち着きのない彼女は、子供が有する素直な鋭さも残していた。

「そ、それは……」

これには咲耶も参つたと、湯飲みにもう一度口を付けて。はたと思いついたように助けを呼んだ。

バスタブに収められた彼は、手足を縛られ、猿轡を噛まされている。

「いあうんあああ」

故に言葉にならない訴えを投げかけているが、鈴凜は完全に無視。

隣にいる少女を見れば、無視せざるを得ない。

「初めまして」

そう声をかけてきた少女は、一糸纏わぬ姿なのだから。

しかし鈴凜は百合子を抱え、バスルームを出ようとしたそのとき、振り返ることになる。

「あなたたちの妹、十三女の結菜です」

+

「百合子さん、結婚二周年おめでとう！」

「あーんど、亞里亞ちゃん、成人おめでとう！」

「そして、ようこそ十三女 結菜ちゃん！」

「かんぱーいっ！」

結菜による突然の自己紹介の後、部屋に入ってきたのは残りの姉妹十二名。つまり、姉妹全員だった。

そして運ばれてきたのは、特大のケーキ。

「いんやー、盛り上がったねえ。しっかし結菜ちゃんが脱いで縛ってるとは思わなかったけど」

「山神先生が言っただんじやないですか。兄さんはそういうのが好きだって……」

窓が開け放たれ明るいラブホテルの一室。

「そ、そうだ、亞里亞ちゃんはどう思う？」
 けれども、助けは来なかった。

「亞里亞ちゃん、寝ちゃったね……」

綺麗に座った姿勢のまま、首を折ることすらなく眠っている。一同お人形さんのような彼女に笑みをこぼして、席を立った。「もう遅いわ。とにかく寝て、明日の朝、百合子さんと話しましょう」

咲耶からのお開きの提案に、みなは席を立った。

+

「ここまで来ると壮観ね……」

咲耶の深い溜息が向けられた先は、相変わらずの二人だった。

「何よう、咲耶ちゃんだってノリノリだったくせにー」

「そうデスよ！ 久々に兄チャマをチェキするのデスから、思いつきり楽しむのデス！」

よく晴れた祝日の今日、都内某所は買い物客で大賑わいだ。

そんな中の喫茶店には、ひと味違う楽しさを醸し出すテーブルがあった。

「だよねー。稼ぎをたんまり突っ込んで買いそろえた機材を大投入だよ。ちよっただけ会社から拝借したものあるけど」

人目を憚ることなく、所狭しとテーブル、テーブル脇、さらには椅子の下にまで並べられた機材の数々。

鈴凜は場所を確保するなりあつという間に機材をセットアップした。流れるようなケープリングが手練れを演出している。

それだけでも珍しい光景だろうが、一室に十五名もの女性がいるという状況は、もはや稀と言っていいに違いない。

「いやいや、間違いない好きよ？ あんちゃん押っ勃ててたでしょ？」

「ま、まあ、確かに。踏んでみたら硬かったかも知れません」

眞深美と結菜。

十三人目同士の話を耳聴く聞いていたのは百合子だ。「おめでとう」とたくさんの妹たちに囲まれながら、隣の航に耳打ちする。

「し、縛られるのとか、お好きなんですか」

同時に真っ白な肌を赤く染める彼女を見て、妹たちは「ごちそうさま」と改めて笑顔を送った。

パーティの中でも、彼女はもちろんマイペースだ。

「兄やとじいやの、子供は、何人かな？ 十四人？ もっと？」

部屋中に黄色い悲鳴が飛ぶ。

「お兄様、私たち一人ずつに産ませれば、あつという間よ？」

「うん、花穂がんばるっ！」

「ヒナもー」

「は、はいっ、兄上様のお子様でしたら……」

「仕方ないなあ、ボクも協力してあげるよ」

「四葉もデスよ！ 二人くらいがんばっちゃおうかなっ」

「それではワタクシは三人くらい……」

「えー、私の身体は高いよお？」

「デスよ。でもでも、兄チャマならただでやっちゃいマス！」

「仕方ありませんねえ。でも、姫のおっぱいは赤ちゃんだけのものですよ」

「私もちょうど、弟子が欲しかったところだ」

咲耶は千影の思惑も気にせず、亞里亞を引き連れ、ゆつくりとホテルに入った。

一方、装備を固めて突入した鈴凜部隊。

入ってすぐに現れたのは、*きじや*だった。

久しぶりだったが、すぐにわかった。プロミストアイランドの何でも屋、あの*きじや*である。その彼曰く「302だよ」となれば、部隊は当然302を目指した。

しかしこれがすでに、罠だったのかも知れない。

「きゃーっ！」

「ひゃっほおおいっ！」

「うあああああっ！」

302に向かおうと喜び走り出した粗忽者たちの先には、罠の連続。早くも生き残りは二人である。

「まさか本気で罠を仕掛けていようとは……」

鈴凜隊長は鋭い視線を維持しながらも、状況の厳しき、部隊の惨憺たる様に落胆を隠せなかった。

もう一人の生き残り、百合子はどこまで冷静なのか、鈴凜に指示を仰ぐ。

「ホテルに落とし穴……。女はおそらく、このホテル全体を掌握しています。鈴凜様、どうなさいますか」

「私たちに選択肢はない、でしょう？」

「そうですね」

百合子の言葉をきっかけに、二人は改めて戦意を取り戻した。

無事に階段を上りきり、三階の廊下へ。

「おーけー、誰もいない」

廊下の安全を確認すると、二人はついに、302の前まで来た。鈴凜が対閃光ゴーグルをかけると、工具差しからスタングレネードを抜く。

百合子もゴーグルをかけたことを確認し、鈴凜はドアノブに手をかけ、百合子と息を合わせた。

（行くよ）

（はい）

——ガチャ

ドアを開放し、スタングレネードを投擲。

閃光とともに鈴凜が突入。

正面、クリア。

左方ドア裏側、クリア。

引き続き百合子も突入、サブマシンガンを右方バスルームに向けたまま、鈴凜を援護。

バスルームこそが、この部屋で残された唯一の空間だ。彼女と航はおそらく、そこにいるのだろう。

（入る！）

引き戸を開け再びスタングレネードを放り込み、鈴凜が突入。直後に響いたのは発砲音ではなく、鈴凜の声だった。

「百合子さん、来ちゃダメっ！」

衛の科白に、この場面であれば誰もが、続いて突入するだろう。

戦闘の構えを崩さぬままバスルームに入った百合子は再び、卒倒した。

「百合子さんっ」

鈴凜は倒れゆく彼女を支えながら、航に視線を向ける。

「アニキ、最低っ！」

「最近の喫茶店は電源があって便利だね！」

次々と機器の電源を入れていく彼女の科白は、ジョークなのか勘違いなのかわからない。

彼女たちをさらに光らせているのは服装だ。

「調査と言えばダークスーツ、デスよね？」

家を出る前から咲耶に白旗を振らせたのは、四葉が着込んだスリーピース。

「紳士服仕様の特注品デスよ。その辺の色香を振りまく婦人物とは一線を画しマス！」

片手をポケットに入れ斜に構える。堂に入った姿には感心したが、それ故余計に異様な雰囲気を漂わせていた。

その雰囲気にはやられたのは鈴凜である。

「わあ、四葉ちゃんカッコいい！」

「ふっふっふっ、きつとわかってくれると思って、鈴凜ちゃんの分も用意してマスよ」

「わああ、私もあるの？ やったあ」

そして今、この眩しくも黒いテールに至るのである。

「うーん、この映像は百合子さんには見せられないなあ」

「どうしたデスか？」

鈴凜は四葉の間に応じ、並べられた大型モニタの一角を示す。

「あっちゃー、腕を絡めてパッチシイちゃつてマスね」

「どう見てもデートだよなあ。女子中高生相手かあ、アニキつてばやるう」

今やこのテールには、機材と二人、そして咲耶だけだ。

他のみなは初めこそ一緒にいたが、早々に飽きたらしい。真深美や衛は百合子を思つてのことだろう、せつかくだからとウイン

ドウシヨッピングに出て行つて数時間。引き続き今日一番楽しんでいる二人に、一歩引いていた咲耶が問いかけた。

「それで、こんなこととしてどうするのよ？ お兄様とこの子が、デートしているって事実に変わりはないのよ？」

「まあねー。これを材料に強請……ではなくって、お小遣いをせびるのいいかもね」

「四葉はそんな悪者ではないのデス」

かつてみなが幼かった頃、兄妹が揃って暮らしていた十三年も昔の笑顔が、そこにはあった。

変わってしまったのはお兄様、そして私なのだろうか。咲耶は不安を晴らすようにコーヒーを呷ると、改めて二人に問う。

「知つてどうするの？ そもそも写真の一枚もあれば、お兄様だつて嘘はつけないでしょう？」

「そうデスねえ。強いて言えば、純粋な興味から二人の痴態を……」

「私もかなあ。金銭上の利益のためではなく、専ら個人的な技術の興味によって行う自己訓練——ってポケてる場合じゃないよ！ こりや楽しくなってきた！」

鈴凜の視線の先には、この辺一体の地図に航たちの行動履歴が線として記された画像だ。刻々と延びる線が示している先は、鈴凜を、四葉を、そして咲耶を動かすに十分なものである。

「いよいよ四葉の出番デスね。尾行と言えは四葉、四葉と言えは尾行デス」

「これとこれは持つて、と。あとは片付け依頼ね」

コートを着込み飛び出す四葉、機材を引つ提げ後を追う鈴凜。残されたのは咲耶と。伝票。

「会計は、私かしらね……」

彼女は店員からの冷たい視線に耐えて支払いを済ませる。そして生身と入れ替わりにやってきたメカ鈴凜に片付けを任せ、喫茶店をあとにした。

おなじみルーペ片手の四葉を先頭に、機材を引っ提げた鈴凜、買い物袋を引っ提げた花穂と衛が続く。

「チエキチエキ、どこに入るデスかあ？」

「どこに入れるの間違いじゃないのー？」

「きやあつ、鈴凜ちゃんつてばっ」

きやつきやと騒ぎ人氣のない路地を進む。航と謎の少女からはそこそこの距離が離れているとは言え、バレてしまうのではなからうかという尾行。相変わらずの四葉である。

少し離れて後を追うのは、コーヒー片手の真深美、手を繋いだ亞里亞と百合子、そして咲耶。

あわせて六名が行くは都内でも有数の名所だ。しかし、彼女がそれを知るはずもない。

「ねえ、じいや」

亞里亞はくくつと繋いだ手を引いて、百合子を呼んだ。

「何ですか、亞里亞様」

昨日倒れたのが嘘のように、凜とした百合子が応ずる。亞里亞の前の彼女はいつだって、姉のようなメイドである。

久しぶりに百合子と過ぐす亞里亞もまた、彼女にべつたり。

「これから、どこに、行くの？」

こくと首を傾げた亞里亞の瞳は、今日も真つ直ぐだ。

一方の百合子は、視線を外し頬を赤らめる。

「えっと、それは……」

「じいやも、わからないの？」

二人のやりとりを後ろから見ていた咲耶は歩みを止めていた。そして改めて、物思いに浸りそうになったとき。

「こんな場所で、あの頃を思い出すなんてね」

咲耶に声をかけたのは真深美だ。

彼女も同じく、亞里亞と百合子を見ながら、続けた。

「ま、今日はそーゆー日なんだけどね」

「どういうこと？」

含みのある科白を聞いて咲耶が真深美を見ると、真深美は再び歩み出す。

「教えたげない。生徒との秘密だからねー」

「何よ、それ」

小走りでみなを追う真深美を見て、咲耶も小さく笑い、後を追う。

その刹那。

「あーっ！」

鈴凜の叫びに、みんなの注目が集まる。

「私の尾行マシン、びつたりくん三号がつ」

そして次は、先行していた四葉だった。

「みんなみんな、大変デスよ！ 兄チャマたちが入りました」

「きやあつ、鈴凜ちゃんつてばっ」

「……花穂ちゃん、鈴凜ちゃんはまだ何も言っていないから」

小さなボケと突つ込みを繰り返している隣で、彼女は静かに燃えている。

「あのアマ、この私に喧嘩を売ったな？ やってやろうじやない

の！」

鈴凜の視線はキツと狙いを捉える。

両肩の機材をバサツと落とすと、腰の工具差しから鈍い光を引き抜く。

「行くよ！」

彼女がモンキーレンチ片手にみなの方に振り向くと、死の商人が立っていた。

「——ふふつ、さあ、戦争だ」

「ち、千影っ!」

「相変わらず神出鬼没ねえ」

突如現れた千影は、周りの反応を気にすることもなく、両手に持っていたアルミケースを開く。

「好きなのを手にするがよい」

「ありがとう。遠慮なく使わせてもらうよ」

鈴凜はケースからいくつかピックアップアップ、みなに向かい言い放った。

「我がびつたりくん三号を射殺した腐れ女は、アニキを人質に、目の前のホテル・アラモードに立て籠もった。我々の任務は人質の救出である。女の生死は問わない。さあ、戦えるものは武器を取れ。突入する！」

工具差しにスタングレネードを差し、サブマシンガンを構えた彼女の瞳は、真つ直ぐ、ターゲットを捉えている。

ここは都内某所、ラブホテル街。射たれる弾は、愛か、憎しみか。

数分後、ボディアーマーまで着込んだ妹たちの姿が、ホテル・

アラモードの入り口に並んだ。

「女は私の可愛い可愛いびつたりくん三号を、たった一発で仕留めた射撃の名手だ。油断するな」

私怨に満ちたコメントともに、鈴凜隊長による注意喚起が行われる。

「いえす、まあむ」

「いえす、まーむ」

「いえす、まーむ」

「あいよー」

気合い十分で鈴凜に乗ったのは四葉と花穂、衛、真深美。そして意外にも——

「Yes, mam」

百合子が続いた。

スカートから覗く膝のプロテクターを見て、咲耶は今日何度目の溜息をつく。

「いったいどうなってるのよ……」

そしてやはりお留守番組、亞里亞も不思議そうに見つめていた。

「じいや、どうしちゃったの？」

しかし彼女たちの視線など、鈴凜部隊には届かぬらしい。

武装した五名は静かにしかし素速く、作戦を開始した。

「突入する！」

誰が仕込んだのか、まるで軍隊のように、一人ずつ安全を確保して突入していく。

その様を薄笑み浮かべて見守る千影は、隣の咲耶に言った。

「踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら？」

「損で結構よ。行くわよ。何階なの？」